

~~~~~  
論 説  
~~~~~

グローバル系学部学生の
グローバルキャリア志向とその変容プロセス
——TEA による質的研究主導型混合研究方法を用いて——

中 川 久美子*
抱 井 尚 子**

要 旨

グローバル人材育成を目指すグローバル系学部には、外国語能力（主に英語能力）が高く海外経験も豊富な学生が、非グローバル系学部に比べ比較的多く存在する。このような学習環境における相互作用を通じて、学生たちはグローバル志向の醸成・変容のプロセスをどのようにたどっているのだろうか。本稿では、準拠集団と自己評価という社会心理学的概念を手掛かりに、グローバル系学部の学習環境に潜む「落とし穴」に着目しながら、学生のグローバル志向とその延長線上にあるグローバルキャリアに対する意識の変容プロセスを、複線経路・等至性アプローチ（TEA）を用いて具体的に考察する。なお、本稿では親研究である張（2015）のアンケート調査を通じて収集した研究参加者のグローバルキャリア志向に関する量的データを彼らの語りの分析結果と統合しジョイントディスプレイとして示すことで、質的データの解釈の trustworthiness を高めることを目指す。したがって、本研究は質的研究主導型混合研究方法を用いた実証研究の一例といえる。

* 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科—2020 年度科目等履修生

** 青山学院大学国際政治経済学部教授

キーワード：グローバル志向，複線経路・等至性アプローチ，質的研究主導型混合研究法

1. はじめに

急速にグローバル化が進む現代社会において、グローバル人材の育成が産官学の共通の課題となっている。世界を舞台に、外国語能力を駆使して、様々な文化的・言語的背景を持つ人々と協働する専門的職業人たるグローバル人材を育成することは、今や日本の高等教育機関が担う重要なミッションの一つといえる (Yonezawa, 2014)。これを背景に、政府は高等教育機関の国際競争力を高めるため、2008年には優れた留学生獲得を目的とした「留学生 30 万人計画」を打ち出し、さらに 2014 年からは産学官連携による「スーパーグローバル大学創成支援事業」をスタートさせている。この流れに伴い、グローバル人材育成を目的としたグローバル系学部や学科が近年数多く設立されている (両角, 2011; 吉田, 2014)。

このように、政府がグローバル人材育成のための環境整備として様々な政策を推し進める中で、グローバル人材教育の担い手である高等教育機関はどのような成果を上げてきたであろうか。地球を舞台に多様な背景をもつ他者と協働できる高い外国語能力、異文化理解、主体性、積極性や倫理観といった資質を有する高度なグローバル人材 (グローバル人材育成会議, 2011) が希求されるのであれば、グローバル人材候補生としての大学生を対象とした実態調査は不可欠であろう。特に、国家間・文化間の関係や、人と人との異(多)文化コミュニケーションの専門知識を提供し、グローバル社会に貢献する資質を有する人材を陶冶することをミッションとして掲げる、いわゆるグローバル系学部の教育をとおして学生たちのグローバル志向が確実に醸成されているのかを、学生自身の視点から明らかにすることは不可欠であると考ええる。

しかしながら、管見の限り、グローバル系学部学生の経験の語りに着目した調査は未だ乏しく、グローバル系学部の教育環境において学生たちのグローバル志向とその延長線上にあるグローバルキャリアの選択に対する意識が確実に

醸成されているのか否かは明らかではない。また、グローバル志向やグローバルキャリアの選択に対する意識の醸成がグローバル系学部の教育環境においてどのように促進もしくは阻害されるのか、そのプロセスもまた明らかではない。

以上を踏まえ、本研究では、グローバル系学部の教育環境における学生のグローバル志向とその延長線上にあるグローバルキャリアの選択に関する意識の変容について、インタビュー調査を主とし、量的データを副次的に使用する質的研究主導型混合研究法(3.1 参照)を用いて探究する。グローバル系学部の特徴として、長期にわたる海外就学経験をもついわゆる帰国子女¹⁾が多いことや、一般的に外国語能力(特に英語能力)が高いことが挙げられる。このような環境において、学生たちが自身の英語力をどのように評価し、その評価が彼らのグローバル志向の醸成とグローバルキャリアの選択に関する意識にどのような影響を与えてきたのか、そのプロセスを「自己評価」と「準拠集団」といった社会心理学的概念を手がかりに考察していく。本研究のインタビューデータの分析には、複線経路・等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)(安田・サトウ, 2012)を用いる(3.2 参照)。また、本研究の研究協力者は、親研究にあたる(張, 2015)のアンケート調査の参加者の一部(埋め込みサンプル)であり、そこで収集した海外志向性得点も補足的に使用する。

2. 先行研究

本節では、グローバル人材育成に関する批判的検討を行い、次に自己の能力を評価する上での所属集団の役割について検討するために、特に社会心理学的概念である準拠集団と自己評価の関連について概観する。

2.1 グローバル人材の議論の変遷と見過ごされた問題

政府は、グローバル人材に求められる要素を「グローバル人材育成推進会議

1) 親の仕事の都合などで長年海外で過ごして帰国した子供。デジタル大辞泉, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.hawking1.agulin.aoyama.ac.jp>, (参照 2020-07-12)

中間まとめ」の中で次のように列挙している。要素Ⅰの 語学力・コミュニケーション能力, 要素Ⅱの 主体性・積極性, チャレンジ精神, 協調性・柔軟性, 責任感・使命感, 要素Ⅲの異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ, そしてこの他にも幅広い教養と深い専門性, 課題発見・解決能力などがここに含まれる(グローバル人材育成会議, 2011)。

グローバル人材育成を掲げる多くのグローバル系学部は, 政府による上記の定義を出発点にカリキュラムを構築し教育実践を行っている。その一方で, 政府によるグローバル人材の定義には, その前提がもつ「偏り」によって, これまで数々の疑問の声が投げられている。たとえば, この定義は, 「グローバル人材」イコール「高学歴男性」という, 社会の中樞が抱く期待から作り出されたイメージが前提となるもので, 実際に自ら海外に出る人の圧倒的多数が「特に高学歴でない女性や男性」であるという現実との乖離がみられることが指摘されている(加藤・久木, 2016)。また, 「グローバル人材」とは本来, 日本企業が雇用する新たな人材に対する総称として用いられるもので, 日本で採用し海外派遣した日本人, 現地採用した外国人や日本人, 日本で採用した留学生などといった, 様々な属性を有する個人が含まれることも示されている(吉田, 2014)。

さらに, 日本政府のグローバル人材の定義が「日本人としてのアイデンティティ」を含めている点も, 自文化中心主義的偏りと結び付けられている。たとえば年々増加する外国人登録者や日本国籍取得者, 外国にルーツをもつ人々, 海外生まれの日本人や帰国子女と, 日本人としてのアイデンティティという要件とのズレが指摘されている(Olsen, 2013)。「日本人としてのアイデンティティ」を過度に強調することによる問題点については, 自民族優秀性意識が「心の国際化」(コスモポリタニズム)を阻む危険性を30余年も前に指摘した岩田(1989)の見解とも軌を一にする。岩田が開発したコスモポリタニズム尺度の構成要素には, 「国際協調意識」と「異文化に対する尊重・理解」に加え, 「国家不要意識」と「反自民族中心主義」が含まれている。

グローバル人材教育のために構築されたカリキュラムにおいても, グローバ

人材の定義の偏りから発生する問題点が挙げられよう。たとえば、大学におけるグローバル人材教育のカリキュラムが「英語力」や「教養教育」などのことばに置き換わったことにより、本来必要とされるべき異文化の人々との交流を通じてグローバルな問題を議論することや、リーダーシップなどの問題が抜け落ちた点が指摘されている(鈴木, 2018)。また、かつて企業が担っていたグローバル人材育成を大学教育が担うことになり、グローバル人材教育の主課題が「海外留学経験」と「英語が話せる」点に移行してしまった点も問題視されている(吉田, 2014)。

以上のように、グローバル人材の定義に関する議論から、政府によるグローバル人材の定義が極めてエリート主義的・自文化中心主義的であるという問題点をはらんでいることが伺える。また、「グローバル人材」イコール「海外経験が豊富な英語能力が高い人材」というイメージが強調されればされるほど、これらのイメージと自身を同一視できないという理由から、皮肉にも若者たちの「内向き志向」が強化されてしまう部分があることも否めない(稲垣・櫻井, 2014; 金子・清松・増田・公平, 2016)。筆者らのこれまでの経験に照らすと、グローバル系学部へ惹かれ入学する学生には、海外経験があり、異文化に高い関心を持ち、語学(英語)が得意であるといった者が一般的な学部 비해相対的に多い傾向がある。その一方で、海外経験はないものの語学力については高校まではそれなりに自信があった者や、海外経験も語学力への自信も全くないが、何となく海外に憧れてグローバル系学部への進学を決めたといった者も決して少なくない。したがって、英語教育や海外留学を推進するグローバル人材教育環境において、様々なバックグラウンドをもつクラスメートとともに学ぶことによって、自身を「海外経験が豊富な英語能力が高い人材」と同一視することができない(またはできなくなった)学生が、内向き志向という逆向きの流れに向かう可能性は多いにあり得る。このように、政府の定義を前提とするグローバル人材育成の教育環境においては、看過できない「落とし穴」が潜んでいる可能性がある²⁾。これはつまり、海外志向性が英語学習動機を高めるという先

2) 稲垣・櫻井(2014)は、グローバル人材の育成を目指す国際政治経済学部の学生を

行研究 (Yashima, 2009) に反し、他者との比較により英語力に対する自信をなくすことで、高かった海外志向性が低減し得る可能性といえる。

2.2 準拠集団と自己評価

ここからは、2.1において言及したグローバル系学部の教育環境に潜む「落とし穴」について経験的研究を実施する上で示唆を与える理論的視座として、自己評価における準拠集団の役割について検討する。最初に準拠集団について概観し、その流れの中で自己評価の概念についても先行研究を検討する。

2.2.1 準拠集団の概念について

準拠集団の概念は、アメリカの社会心理学者 Hyman (1918 館・七森 1992) が、一般に客観的事実によって考えられていた地位の評価は、実際には評価する人の友人や知人、同僚など身近な集団と主観による比較によって左右されていることを明らかにしたことが始まりである。これにより、Hyman は人の地位評価の基準となる小集団を準拠集団と呼んだ。Merton (1957 森東吾・森好夫・金沢・中島訳 1961) によれば、準拠集団には規範的類型 (個人が同一化したり所属したいと願っている対象) と比較的類型 (個人が自分を評価する基準として用いる対象) の 2 種類があると述べた。

さらに、富永・塩原 (1975) によると、準拠集団 (reference group) とは「人が自分自身を関連づけることによって、自己の態度・判断・評価・意識の形成

対象とした調査によって、多くの学生がグローバル人材のイメージとして「語学力がある人」や「多文化理解ができる人」を挙げている。その一方で、自身はグローバル人材の資質はもっていないと報告していることを指摘し、その原因の一つとして学生がもつ自身の語学力に対する低い評価の可能性を挙げている。また、赤津ら (2018) は、同じく国際政治経済学部の学生と社会科学系の 2 つの他学部の学生に対してアンケート調査を実施し、仮説どおりグローバル系学部の国際政治経済学部の学生の方が社会科学系 2 学部の学生より高いグローバル志向を有することを確認する一方で、大学生の平均的英語力とされる TOEIC561 点レベル (調査参加者全体の 23.8%) においては両者のグローバル志向性のレベルの高さが逆転することを報告している。赤津らは、この逆転現象を国際政治経済学部の英語の略称を取って「SIPEC 症候群」と呼んでいる。

と変容に影響をうける集団のことである」と定義している。富永・塩原（1975）は、準拠集団は人の生育環境や家族、職場など個人の身近な所属集団から成ることが多く、その集団の価値規範を内面化し、自らの態度をつくり上げている。従ってこの概念は、ひとつの集団に限らず複数の集団、或いは非所属集団と自己を関連づけることによって、人々がどのような態度や行動をとるか解明するのに有効であると述べている。

このように準拠集団の理論は個人が所属する複数の集団から構成され、自己（個人）と社会において相互作用的に影響し合うことが分かっている。そのため、準拠集団論は自己評価に影響を与えると考えられている。そこで、次に自己評価に関する先行研究を概観する。

2.2.2 自己評価に関する研究

自己評価に付随する自尊感情は他者と比較して変化することが分かっており、Morse & Gergen（1970）の実験によれば、優れた他者を前にした人は自分自身には低い評価を与え、そうではない他者を前にした人は自分ではできると高い自己評価をした。

このように自己と他者とを比較して自己評価する社会的比較（social comparison）の研究は、Festinger（1950, 1954）が社会的比較論を提唱したことが始まりである。「社会的比較は自分と他者とを比較することの総称であり、それは状況が不明確な時に明確な自己評価を得るために行われる」と定義されて以来、主に社会心理学の分野で研究がなされてきた（Collins, 1996; Felson & Reed, 1986; Morse & Gergen, 1970）。

高田（2011）によれば、社会的比較の研究は大別すると 1) 社会的比較の機能、2) 社会的比較の実態に分けられるという。Festinger は達成や成果に関して正確に自分を知るという側面に注目し、類似した他者と比較することの重要性を説いた。この自分の目標に近いところにいる他者「類似他者」と自己とを比較することによって、自己評価が規定されており、この類似他者には下方比較（downward comparison）と上方比較（upward comparison）がある。下方比較は

自分より劣る他者と自身を比較することにより自尊心が低下した時に自己高揚を行うための機能を持ち、上方比較は自分よりも優れた他者を自己実現の対象とすることで高揚感を得ることを可能にする。このように、上方比較及び下方比較が自己に対して働きかける効果は状況によって異なるということが分かっている。

以上のように、準拠集団や自己評価に関連する研究は多岐に渡っている。だがそれらの多くは量的な研究が主流であり、複数の要素(変数)の関連性を検討する知見は豊富であるが、実際に集団を構成する成員たちの声を主軸とした質的研究の蓄積は乏しい。

グローバル人材育成に関しては、政府や経済界から様々な政策や提言がなされてきたが、その前提となるグローバル人材の定義がはらむ「偏り」に対して主に学界から異議が唱えられている。しかしながら、現実には多くの大学はグローバル系学部の教育を通して政府(文部科学省)が示す方向性に沿ってカリキュラムの編成や改定を行い、国や経済界の要請に応答しようと試みている現状がある。そして、その試みの中で当事者たる「グローバル人材候補」としての学生が、何を体験し、何を感じているのかに真摯に耳を傾けることは後回しになってきたといえよう。したがって、本研究は、グローバル系学部学生のグローバルキャリア志向がグローバル人材育成を目指す教育環境の中でどのように変容するのかを、彼ら自身の視点から探究することを目指す。

2.3 研究目的とリサーチクエスト

グローバル人材育成を目指すグローバル系学部には海外就学経験者が多く集まる傾向があり、外国語能力(特に英語)や海外経験において多様な背景を有する学生たちがともに学んでいる。本研究は、このようなグローバル系学部の教育環境におけるクラスメートとの相互作用を通じて、学生たちのグローバル志向およびその延長線上にあるグローバルキャリアの選択に対する意識(つまり、グローバルキャリア志向)がどのように変化するのかを明らかにする。

筆者らは、本研究におけるグローバルキャリア志向を、「海外を拠点に、異文

化・多文化の背景をもつ人々と積極的に協働するキャリアを目指す意識」と定義し、以下のリサーチクエスチョンを設定する。

グローバル系学部の教育環境において、グローバル人材としての資質（例えば、外国語能力や海外経験など）に関する学生の自己評価とグローバルキャリア志向は、どのような変容プロセスをたどるのか。

3. 方法

本研究では、質的研究主導型混合研究法デザイン（Hesse-Biber, Rodriguez, & Frost, 2015; 抱井, 2015）を採用した。このデザインでは、質的研究を主とする調査の中で、量的データが副次的に使用される。したがって、本研究の主要部分は TEA を用いたインタビューデータの分析であり、質的データの解釈の trustworthiness³⁾を検討する目的で、本調査の親研究である張（2015）において収集されたアンケート調査データの一部を使用した。

3.1 データ収集

青山学院大学国際政治経済学部の学生を対象とし、一対一の半構造化インタビュー調査法を用いて本調査を実施した。データ収集は 2016 年 2 月～2016 年 11 月に行った。本インタビュー調査の 1 年前に調査協力者が参加した、張（2015）によるアンケート調査から得られた彼らのグローバル志向性得点（6 件法）を量的データとして使用した。TEA が人生における個人のさまざまな選択のトラジェクトリーを現在から過去を振り返り時間軸に沿って考察する手法（3.2 を参照）であることと、量的データと質的データの収集に 1 年間という比較的長期のタイミングのズレがあることから、本研究は後ろ向き縦断研究的な要素をもつデザインになっている。

3) Lincoln & Guba (1985) によって提唱された質的研究の重要な評価基準で、量的研究の妥当性にあたる。どの程度研究結果が信用に値するものかを示す。「信用性」「真実性」「信憑性」などさまざまな訳し方があるため、本稿では trustworthiness と英語で表記する。

3.1.1 調査協力者

調査協力者は、データ収集時に青山学院大学国際政治経済学部⁴⁾に所属する1～4年生の12名の学生で、先行して実施されたキャリア選択における海外志向性と老親扶養意識の関連についての日韓比較調査(張, 2015)の日本人参加者(n=160)の一部(埋め込みサンプル)である。張の調査参加者の中でインタビュー調査に協力の意思を示していた学生40名の中から、海外志向性、性別、学年に関して多様なサンプルを得るべく、最大多様性サンプリング(Patton, 2002)を行った。結果として18歳から21歳の男女各6名の合計12名を抽出し、半構造化インタビューの対象とした。

海外旅行や短期留学といった短期海外経験者から、長期にわたる海外就学経験を有する帰国子女まで、調査協力者の半数以上が何らかの形で海外渡航経験を有していた⁴⁾。面接の所要時間は22分～100分であった。面接実施にあたっては、まず研究の主旨を伝え、研究への参加は自由意志によるものであること、インタビューはいつでも中断可能であること、答えたくない質問には答える必要はないこと、匿名性および守秘義務を守り、データは研究者によって厳重に管理され、研究目的のみに使用されることを説明し、ICレコーダーによる録音の許可を得た。研究への参加同意は、同意書に署名することで示してもらった。データ収集は、大学内の会議室で行った。調査協力者の属性は表1に示す。

3.1.2 質問項目

インタビューガイドを作成し、下記の項目を中心に半構造化インタビューを行った。

- ・家族構成について。
- ・海外経験や留学経験の有無、帰国子女かどうか。
- ・留学先やサークル活動では、どのような経験をしたか？

4) 国際政治経済学部の6割の学生が在学中に留学経験(協定校・認定校・その他のプログラムを含む)をしている。青山学院大学国際政治経済学部・研究科ホームページ「数字で見る SIPEB」<http://www.sipecb.aoyama.ac.jp/data/>

グローバル系学部学生のグローバルキャリア志向とその変容プロセス

表1 調査協力者の属性

仮名 ^{注1)}	M1	M2	M3	M4	M5	M6	F1	F2	F3	F4	F5	F6
性別	男	男	男	男	男	男	女	女	女	女	女	女
学年 ^{注2)}	3年	4年	4年	4年	2年	4年	2年	2年	2年	4年	4年	4年
就活経験	無	有	有	進行中	無	有	無	無	無	進行中	進行中	進行中
海外経験 ^{注3)}	有 (婦)	有 (婦)	有 (婦)	有 (長)	無	無	有 (短)	有 (婦)	有 (短)	有 (短)	無	無
英語クラス ^{注4)}	上級	上級	中級	上級	中級	中級	上級	上級	上級	上級	上級	中級
兄弟姉妹	長男	長男	長男	一人子	次男	一人子	長女	長女	長女	次女	一人子	次女
海外志向性得点 ^{注5)}	5.38	4.00	5.75	5.75	3.12	1.75	5.25	5.00	4.88	4.88	4.63	2.63

注1) M1～M6は男子学生，F1～F6は女子学生のインタビュー調査協力者を示す。

注2) 表の「学年」は，インタビュー時の学年である。

注3) (婦)は婦国子女，(短)は1年未満の海外経験，(長)は1年以上の海外経験を指す。

注4) 国際政治経済学部では，1・2年生の必修英語科目のクラス分けを，入学時のTOEFL ITPスコアに基づき実施している。例年，スコアの範囲は300点台後半から600点台前半(中級レベルは500点台半ばから後半，上級レベルは500点台後半から600点台前半の範囲に収まることが多い)で，平均的なスコアは500点前後である。

注5) 親研究(張，2015)の質問紙調査で得られた6件法による海外志向性得点 [$M=4.43$ ， $SD=1.08$ ($N=160$)]。「将来，海外に仕事の拠点を持ちたい」，「将来，海外との関わりのある仕事に就きたい」，「国によっては，海外で働きたい」など，大学生のグローバルキャリア志向を測定する全8項目 ($\alpha=.90$) が用いられた。

- ・将来のキャリアについて，どこでどのような仕事をしたいか？
- ・どのような職種や会社か？ 国内か海外か？ その理由。
- ・英語クラスはどのレベルか？
- ・英語クラスで周囲の学生からどのような影響を受けたか？
- ・就活状況について。(4年生のみ)
- ・内定先の決定理由について。(4年生のみ)

3.2 質的データ分析

質的データ分析の方法には、複線経路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA) (安田・サトウ, 2012) を採用した。TEA は個人の経験の多様性を記述するのに適した手法であり、非可逆の時間 (時間の流れ) における「等至性」と「複線経路」という概念を特徴とした新しい質的研究のアプローチである。等至性とは、人が経験を重ね、異なる経路を辿りながらも類似した結果に辿りつくということを示す概念である。その等至性を実現する点を等至点 (Equifinality Point=EFP) と呼び、これが研究上の焦点化のポイントである。本研究では「自分らしいキャリアを志向する」ことを等至点とみなすことによって、そこに至るまでの学生たちの心の動きや経験を捉え、そのプロセスを記述した。また必須通過点 (Obligatory Passage Point=OPP) は、多くの人が経験すると思われるポイントである。個人の経験の多様性を描き出すなかで、必須通過点は個人の多様性を制約する契機を見つけ易くする働きがある。分岐点 (Bifurcation Point=BFP) とは、多様性を描く複線経路を可能にする結節点のことであり、経路が発生・分岐するポイントである (安田・サトウ, 2012)。また、プロセスにおいて、プロセス自体やそこで生じた選択を促進させるものとして働く力が存在することがある。安田・サトウ (2012) は、それを社会的ガイド (Social Guidance=SG) とし、他者からの支えや社会的な支援などが該当するとした。他方、等至点に至るプロセスを阻害する力を社会的方向付け (Social Direction=SD) とした。以上に述べた概念を用いて、TEA は個人の経験の流れ及び可能性としての複数体験の流れを比較分析することを可能にする。このような特徴を持つ TEA は、大学生のグローバルキャリア志向とその変容プロセスを捉える本研究の目的に有効であると考え、採用した。

分析の手順は、12名⁵⁾のグローバル系学部の学生 (調査協力者) によって語られたグローバルキャリア志向の醸成やグローバルキャリアに対する意識のストーリーを意味のまとまりごとに切片化し、個々にその内容を簡潔に表すような見

5) 安田・サトウ (2012) の提唱する「1・4・9の法則」により、9±2の場合に事例の多様性を捉えることができるという目的に人数的不足はないと判断した。

出しを付けた。その後、各々の学生が自分らしいキャリアを志向するに至る語りを時系列に並べ、研究協力者の中で共通した出来事や経験を分岐点や必須通過点として定め、TEM 図 (TEA により作成される図。Trajectory Equifinality Model の略称) に描いた。また、概念の分類途中で、個々に共通した概念や名称が適さない場合は、分析をやり直し概念の修正と類型化を繰り返した。なお、等至点は太い二重線で、必須通過点を太い点線、分岐点を太線と細線の二重線、その他の概念を実線で囲み、各項目を→で繋いだ。

なお、本稿では、TEA による質的データ分析の結果の trustworthiness を高めるため、語りのデータと親研究である張 (2015) から得られた海外志向性得点を統合し、2つのデータが収斂するか否かを検討する。

4. TEA による質的分析結果

4.1 大学生のグローバルキャリア志向の醸成プロセス

インタビュー調査で語られたデータを分析していくなかで、グローバル系学部の学生のグローバルキャリア志向の変容プロセスは、3つの主要なテーマを結びつけることによって描き出すことができた。それらは、【A: 英語力・海外経験とグローバルキャリア志向の関係にみられる多様性】、【B: SIPEC ショック⁶⁾による自信喪失とそこからの回復】、【C: グローバルキャリア志向の捉え直し】である。また、それぞれのテーマにおける語りは、その類似性に応じてグループに分類した。以下ではテーマごとの語りとプロセスについて、本節末の TEM 図を基に概説する。なお、インタビューの逐語表記における「……」は相槌や短文の省略を、(略)は複数の会話文の省略を意味する。

6) SIPEC とは国際政治経済学部の英語名称である School of International Politics, Economics and Communication の頭文字を取った略称である。SIPEC ショックとは、国際政治経済学部入学後に主に英語必須科目の履修をとおして、周囲の学生の語学力の高さに圧倒されるとともに、自身の語学力に対し自信喪失をするという経験のこと。第2著者のこれまでの観察経験から生まれた造語。

4.2 テーマ A: 英語力・海外経験とグローバルキャリア志向の関係にみられる多様性

グローバル人材を目指す国際政治経済学部 of 学生は、大学入学以前から英語の成績が良好で海外経験を有している者も少なくない。また多くの学生たちは、大学卒業後に英語を活かしたキャリアに就くことを視野に入れて国際政治経済学部への進学を決める傾向がある。しかし、今回のインタビュー調査から、グローバル系学部を選んで入学してきた学生たちの英語力・海外経験と彼らのグローバルキャリア志向の関係は一様ではないことが明らかになった。

以下では、学生の英語力・海外経験とグローバルキャリア志向との関連において、類似する語りをケース A1 から A5 の 5 つに分類して提示する。

【ケース A-1: 高い英語力や海外経験がグローバルキャリア志向に結びついているケース】

F2, M1, M4 による以下の語りは、高い英語力や海外経験をもつ学生が、グローバルキャリアを強く志向する語りである。グローバル系学部に進学する学生の語りとしては、典型的なものであるといえる。

A-1-F2: 私は [米国と日本の生活が] ちょうどいま半分って感じ。(略) 旅行とかもすごく好きで。他の国にも結構、旅行で行ってたりしてはいたので。冒険心じゃないですけど、なんか、人と違うことをしてみたいな、っていうのは、すごく強いですね。

A-1-M1: 僕 1 才～7 才までイギリスに住んでたんですよ。日本人なのにずっとヨーロッパに住んでいることもあって、アジアに行ってみたい、っていう気持ちが強かったんです。(略) 海外でいえば、先進国より発展途上国に興味があるので。どっちかっていうと、ローカルでニッチなところに行きたい傾向がある僕は。

A-1-M4: 高校 2 年生の頃に、2010 年から 1 年間、ノルウェーに行っていました。……その時の新聞記者の方が、すごい熱い方で、涙をこらえながらインタビューしている姿が、すごい印象的。(略) できたら、[ノルウェーみたいなところ] 仕事とかもあれば、こうぜひやりたいな、とは思っていますけど。

帰国生（帰国子女）の F2 と M1、また非帰国生で留学経験⁷⁾のある M4 は、豊かな海外経験と堪能な英語力、そして海外生活に対する自信を持っていた。また幼少期や長期海外経験により、実践的な言語能力を含め、異文化における適応力や問題解決力も高いと予測できる。そのため、彼らがグローバルキャリアを志向することは、至って自然なことと思われる。

【ケース A-2: 高い英語力や海外経験がグローバルキャリア志向に結びついていないケース】

F1, F3, F4 に共通するのは、大学入学以前から英語の成績が良かったこと、海外旅行や短期留学経験を持っていることである。それらを通じて高い英語力を修得してきたことが、英語力への自信にも繋がっている。一見して筆者らには、語学力と自信を保持した彼女たちは、グローバルなキャリア志向を携えているかのように思えた。しかしそれらは国際系の大学を志望する要素には成り得ても、積極的にグローバルキャリアを選択する意識にまでは至っていない心境が語られた。

A-2-F1: どうしても海外で、っていう感じではないですね。(略) 高校1年の夏に [イギリスに] 行って。高校と提携があるケンブリッジ大学のひとつのカレッジの提携で、そこに3週間行かせてもらって。(略) なんとなく成績も良い方を維持して。

A-2-F3: 高校の時の成績で、英語だけがこう、良い点数をとれるというか、コンスタントに良く取れるのが英語で、一番こう結果が返ってきやすかった。……ヨーロッパ何か国かと、あと、インドとかタイとかに、行ったことがあって。(略) 海外に行った時だと、結構英語、多言語ですし……今までとは違う人たちだし……自分の精神的に厳しいのかな、ってちょっと思っちゃったりとか……あっさり言えば、日本にいたほうがいいのかな。

A-2-F4: カナダに21日、イギリスに3週間、でもう一回イギリスに3週間。で、その程度だけど、やっぱけっこう英語好きで。高校選びとか

7) M4には高校2年生の時(2010年~2011年)に1年間のノルウェー留学経験がある。

もそれを軸にやって、勉強してきたら……TOEIC が、なんか 900 点とか越えて。(略) イギリスすごい好きなんですけど。すごい好きだけでも、それよりも日本の便利さとか、空気とかのほうが好きだな、っていうのがあって。

このように F1, F3, F4 は海外旅行や短期留学の経験や高い語学力も持っているが、実際にグローバルキャリアを強く望んでいる訳ではなかった。その要因として F1 は大学受験に失敗した後悔があること、F3 と F4 は実家が商業を営むため、実家近郊で暮らすことを望むなどの要因が、インタビューのなかで少しずつ明らかになってきた。彼女たちは、高い語学力と海外経験を持っているにも関わらず、それらをキャリアには直結させず、生活基盤を海外に望まない点で共通している。その意味で、これらの学生はそもそもグローバルキャリアを積極的に志向していないといえよう。

【ケース A-3: 豊富な海外経験によりグローバルキャリア志向が希薄化しているケース】

帰国子女である M2 は、上述の F1, F3, F4 とはまったく異なる理由により、高い英語力と豊富な海外経験とが必ずしも高いグローバルキャリア志向に結びついていないケースであると思われる。幼少期から長期海外経験のある M2 は、文化を超越したコスモポリタニズム (岩田, 1989) の精神が内在化されることによって、そもそも内 (国内) と外 (海外) の境界を意識すること自体に意味を見い出さなくなっていると思われる。

A-3-M2: 自分は帰国子女なので、まああの一応英語も少しできるので、意識してなかったということはないんですけど、……力を活かして海外に行きたいっていうのは、なくはなかったんですけど、そこまで強くないで。

[理由] 逆になんか今まで散々あの、交流とかしてきたから、で、そのあまりなんか、それが普通じゃないですけど、そこにあまり魅力を感じない、っていいですか、なんか外人と喋ろうが、日本人と喋ろうが、もう別にいいかな。……大学入った頃とかは、結構なんか交流したい、って

いうのはあったんですけど……それこそ架け橋になりたい、みたいなのもあったんですけど、なんかどんどんやっていくうちに、あの、なんか薄れてきたというか。……逆にそのずっと日本にいた人たちのほうが、むしろその海外とかを知らないのが、すごい好奇心があって、どんどん行ってきたい、っていうのはあるんだと思うんですけど。

M2のように、豊かな海外経験を有していても、むしろそれが当たり前になることによってグローバルキャリア志向が希薄化する状態について示唆的な視点がある。近年、末田が行った外資系企業で管理職を勤める女性へのインタビュー調査によると、「グローバリゼーションは、心のウチにある。そのことが、本当のグローバルではないか（末田 2017. 異文化コミュニケーション学会発表）」と述べている。これを踏まえると、豊かな海外経験や交流は、異なる価値観や異文化体験のなかで頻繁に消化され、やがて内面化されると特別なことではなくなってしまうかもしれない。バイリンガル M2 にとって、グローバルキャリア志向の希薄化は、グローバル化が内的に進んだ結果を意味しているのかもしれない。

上述した A1, A2, A3 のケースはいずれも、高い英語力や海外経験を有する学生に関するものであったが、国際政治経済学部には、海外経験のない非帰国生も多く在籍している。そのような学生たちの中には、海外への憧れや関心を持ち、グローバルキャリアを志向する学生と、海外への憧れや関心をあまり持たず、グローバルキャリアに対する強いこだわりも持たない学生の 2 つのパターンがみられる。以下では、これらの学生の語りに着目する。

【ケース A-4: 憧れがグローバルキャリア志向に結びついているケース】

熱心に ESS のサークル活動に取り組む F5 は、海外経験のない非帰国生だが、グローバルキャリア志向が高い学生である。大学付属高校から内部進学で国際政治経済学部に入學し、高校・大学の 6 年間をともし帰国子女や留学経験者の多い環境のなかで過ごした F5 は、本格的な就職活動を前に次のように語った。

A-4-F5: [留学のご経験は?] してないです。[キャリアは] ゆくゆくは

海外で、できたら、って思うんですけど。[理由] たぶん人と話すのがすごい好きで、なんかいろんな人と話したいな、っていうのがあるので。……高校に入って、留学する人増えたんです、周りで。……そういう人を見て、なんかフェイスブックとかで見るじゃないですか、そしたらカッコイイって思って。それがいいなって思って。

この語りから、F5が高校生の頃から留学や海外経験を望んでいたことが分かる。それは、留学している友人たちの姿や様子に触れることの多い環境が、F5の意識を国内より海外に向けさせ、「カッコイイ」イメージに拍車を掛けたことも一因だろう。「ゆくゆくは海外で」と意欲的に語るF5の表情には、海外への憧れが原動力になっていることが伝わってきた。

【ケース A-5: グローバルキャリアに対する態度が消極的なケース】

海外経験を持たず、グローバルキャリアにも特にこだわりを示さない、グローバルキャリアに対して消極的な態度を示す学生は、次のように語った。

国立志望で言語学に興味があったF6は、以前から英語の成績が良かったこともあり、国際政治経済学部を志望した。彼女には海外経験はなく、グローバルキャリア志向もない。またF6と同様にM6も高い英語力を有するものの、グローバルキャリア志向が特に高いわけではない。

A-5-F6: 特別、海外に行きたいって言う気持ちはないです。海外に行くことになってもいいかな、とは思いますが。希望があるわけじゃないです。行きたいとか、行きたくない、とか。[留学の経験は?] ないです。[英語は] なんか点取れるし、好きだなあ。

A-5-M6: [海外勤務は] あんまり希望はしてないです。[どうして?] そんなに自分のなかで、なんでその海外に行く必要性あるのか、っていうことが、あまり明確になっていない。っていうことが、第一に挙げられますけど。なんかただ漠然と海外に行きたい、というふうな感覚にはならないですね。

国内キャリア志向の学生は、前述のケース A-1, A-4 にみられた積極的にグローバルキャリアを志向する学生と異なり、海外への興味や関心、海外キャリ

アや留学などについて語ることもなかったことから、彼らは高い英語力を有しているものの、海外への憧れや関心は希薄で、グローバルキャリアを積極的に志向していないようだった。

4.2.1 テーマ A のまとめ：グローバルキャリア志向にみられる多様なパタン

ここまで、テーマ A の英語力・海外経験とグローバルキャリア志向の関係にみられる多様な語りをみてきた。この語りは 5 つのケースに分類することができたが、これらの語りからグローバル系学部を志望して入学する学生の英語力・海外経験とグローバルキャリア志向の関係には様々なパタンがあることがわかった。豊かな海外経験と堪能な英語力を持つ学生は、積極的にグローバルキャリアを志向していた。一方、高い語学力と短期間の海外経験を持っていても、グローバルキャリアを望まない内向き志向の学生がいた。さらに、帰国子女として豊富な海外経験を有するが上に、世界市民としてのコスモポリタニズム精神が内化されることによって、グローバルキャリア志向が希薄化した学生がいたことは興味深い。一方、非帰国生で海外経験のない学生の中にも、グローバルキャリアを積極的に志向する者とそうでない者がいた。

このように高い英語力と海外経験をもつ学生や帰国生であっても、積極的にグローバルキャリアを志向するとは限らなかった。特に英語の得意な学生たちが、グローバル人材育成を目的とするグローバル系学部で、なぜ積極的にグローバルキャリアを志向しないのだろうか。次節では、その一因として浮上した、英語が得意な準拠集団のなかで学ぶことで生じていたある現象に着目する。

4.3 テーマ B：SIPEC ショックによる自信喪失と回復のプロセス

ここでは第 2 のテーマである「SIPEC ショックによる自信喪失と回復のプロセス」の語りをみていく。SIPEC ショックの定義はすでに(注 4)でも示したが、国際政治経済学部入学後の英語の必須授業を通して、高い語学力をもつ周囲の学生と自身を比較することで、語学力に対する自信を喪失する現象である。前述のテーマ A で取り上げた語りの多くは、国際政治経済学部のなかでも上級

レベルのクラスに所属する学生のものである。このクラス分けは、入学時の英語能力試験のスコア⁸⁾に基づくもので、1・2年生の必修英語科目にはこのクラス分けが適用される。上級クラスには帰国子女や留学経験を持つ学生が多く在籍するが、非帰国生や海外未経験の学生も含まれる。学生の語りから、帰国生と非帰国生は意外にも、〈SIPEC ショックを受ける〉・〈ショック経験の意味づけをする〉(BFP) という共通の経験をもつことが浮き彫りになった。以下では、非帰国生が受けたショックと帰国生が受けたショックの特徴を比較してみたい。

【ケース B-1: 非帰国生が受けた SIPEC ショック】

上級英語クラスに所属する学生の多くは、帰国生たちのネイティブ並みの英会話力に驚きとショックを受けたことを次のように語った。

B-1-F3: みんなあんまりやってこなくても、その場でできちゃう、っていうのが、なんかスゴいな、みたいな。……昔はけっこう [英語に] 自信が持てたんですけど、今は、なんででしょう、もっとう、関わり方を変えないと……これから使えないんだなって。

B-2-F4: やっぱ、コミュ [コミュニケーション学科] って帰国生多いじゃないですか。……本当にネイティブ並みにできる人が、「でも私全然だから」って言ってるのみると、あなたで全然なら、私はもっと全然 [ダメ] だ、みたいなのを思っちゃうんで。

B-2-F5: 周りはみんな喋れてたので、ヤバイなって思いましたね。帰国子女の人とかがいると、びっくりしちゃいますよね。(略) やっぱり留学行ってる子とかは、なんか英語力っていうより人として成長して帰ってくるな、っていうのがすごいあるので……そういう面は羨ましいなと思う。

B-2-M4: もう大変でした。みんなペラペラで、驚きました。……でも僕、静岡の高校だったので。そこだと、英語を話せる人が、まず僕くらいしかなくて。高校だと、それが自分のなかで、自信だったんですけど。……崩れ去って。大学に入って。こんな喋れる人があるんだなって。いやあ、東京ってスゴイなって思った。

8) TOEFL ITP (団体向け TOEFL) のスコアを利用している。

F3, F4, F5, M4 は、非帰国生だが高い英語力を持つ学生たちである。いずれも大学入学前から英語に「自信」を持っていた学生である。そんな彼らが同じクラスの「ネイティブ並み」の英語力を持つ帰国子女に対し「スゴいな」「ヤバイな」「羨ましいな」「こんな喋れる人がいるんだ」という驚きと羨望を伴ったショックを語った。そしてこのショックが単なる驚き以上の痛手として個々に響いたであろうことが、「[英語との] 関わり方を変えないと」「私はもっと全然だ」「[自信は] 崩れ去って」という語りからも分かる。これまで自身の英語力に自信を持っていた学生たちは、その自信を見事に打ち砕かれるようなショックを受けていたと考えられる。それほど国際政治経済学部の帰国生の存在は、非帰国生にとって大きな打撃を与えていたのだった。

このように、上級レベルの英語クラスに所属する非帰国生からは、高い英語力を有しているにも関わらず、意外にも自信の無さが吐露された。

【ケース B-2: 帰国生が受けた SIPEC ショック】

同じ上級レベルの英語クラスの帰国生たちは、どのような経験をしていたのだろうか。ここでは、帰国生が経験した SIPEC ショックに焦点を当てる。

幼少期から米国で生活し、日本人というより米国人として育った F2 は、英語力に甘んじていた自分自身について、次のように語った。

B-2-F2: 英語を勉強して行って、なんか中・高って、なんか英語でできれば頭いい枠、に入ってしまう、その環境で、なんか自分が甘えてたのかな、って思って。就職とかも考えたら、なんか日本語、できたらいいな、って。なんか日本人としてなんか日本語できなかつたら、恥ずかしいな、って思う気持ちがあって、そこから、なんか日本の文化はすごく好きになりましたね。

F2 は「英語できれば頭良い枠に入ってしまう」帰国生の状況に「甘えてた」ことを認めながら、それを甘受してはいない。むしろ「日本人として」「日本語ができなかつたら恥ずかしい」と自己評価する。米国人に近い感覚で育った F2 にとって、日本語や日本文化を受容するまでの道のりは、決して容易ではなかつ

た。実際 F2 は、常に米国に帰りたい気持ちだったことを打ち明けた。ここに彼女が受けたショック経験が凝縮されている。日本で生まれ育った学生が正しい日本語を話せること、「日本人らしい」こと、それらが F2 に「日本人らしくない(私)」という気付き(ショック)を与えたと考えられる。つまり高い英語力を持つ日本人学生の存在に対し、確かに F2 の英語力はネイティブ並みだが、日本語や日本文化に不慣れで「日本人らしく」なかった。このショックが F2 に英語力への甘えを内省させ、日本人らしさを見出すようになったのかもしれない。やがて F2 は日舞などを披露する母親の影響を受けながら、さらに「日本人らしさ」を見直していくようになる。

また帰国生の M2 は、F2 とは異なる視点から彼のショック経験を語った。

B-2-M2: 帰国子女の多いクラスだったんですけど、入ってびっくりしたのが、結構その帰国子女じゃない子でも、普通に英語しゃべれるんだな、って思って。なんか青学の人みんな、上手いので英語喋るの。国政[国際政治経済学部]はたぶん、英語喋れる人多いので、びっくりしました。……大学入ってから、ホントに差がないかもな、って思ったんで。

M2 は非帰国生が、流暢に英語を話すことに驚きショックを受けていた。「帰国子女じゃない子でも、普通に英語しゃべれるんだな」というショックを、M2 は新鮮な驚きとして語った。彼はこの後で前述のようにグローバルキャリア志向の低下を語るのだが、もしかしたら非帰国生から受けたショックが、彼が内化した心的レベルでの国際化を助長したのかもしれない。

他方、M1 は帰国生ならではの悩みを抱えていた。一般に帰国子女は、前述の非帰国生の語りからも明らかなように、流暢で高い語学力を持つと思われることが多いのが現状だろう。けれども、そのことが M1 にはコンプレックスであった。その心境を彼は次のように語った。

B-2-M1: [中高一貫に] 帰国子女枠で入ったんで、英語はできる扱いになってたんですけど、あんまボキャブラリーがなかったんですよ。それ

で結構比べられることが多くて。……[帰国子女でない学生は]帰国子女だから英語できるの当たり前、って言うんですよ。……だから、たまにそういう人じゃない人もいますよ。僕みたいに。帰国だけど、他の帰国と比べて、そこまでできるほうではない人って、やっぱりいますよ。帰国にもレベルがあるじゃないですか。それが悔しくて。で、ある程度帰国子女っていわれても、それ相応の成績になるように、まあ、まあ地道にやってみましたね、勉強[英語]は。

M1にとって「英語できるの当たり前」として扱われることは、プレッシャーですらあったかもしれない。一見して海外経験やグローバルキャリアを堂々と語るM1からは、語彙力不足で悩んでいた姿は微塵も感じられなかった。彼の「帰国にもレベルがあるじゃないですか。それが悔しくて」と語るやや強い口調から、帰国生であれば誰でも英語ができる訳ではないこと、さらに一般にその視点は欠落しているという指摘さえ伝わってくるようだった。周囲から「帰国生は英語できる」と一括りにされ、悔しい思いをしてきたであろうM1は、帰国生のプレッシャーとコンプレックスを吐露することにより、自分のような存在もいることを訴えたかったのかもしれない⁹⁾。

4.3.1 テーマBのまとめ：帰国生と非帰国生の相互作用

ここまでは、テーマBのSIPECショックによる自信喪失とそこからの回復のプロセスの語りをみてきた。非帰国生は、ネイティブ並みの英語力を持つ帰国生に英語力の自信を打ち砕かれるショックを受けていた。一方、帰国生は、非帰国生が高い英語力を持つことにショックを受けていた。また、帰国生のなかでも実際にはレベル差があり、英語が流暢なことを当然視されることにプレッシャーとコンプレックスを抱いている帰国生もいた。さらに、非帰国生の存在が帰国生にとって、日本人らしくないことへの気付きや、日本文化に対する理

9) M1の語りにもられる帰国生だからこその葛藤については、末田による『多面的アイデンティティの調整とフェイス(面子)』(2012)が示唆に富む考察を行っている。

解を促すことに繋がっていた。つまり帰国生でも非帰国生でも、高い英語力を持つ準拠集団のなかで、互いに異なるショックを受け与えるという相互作用が生じていたのである。やがてそのショックは様々な刺激となって、個々のグローバルキャリアに対する意識の変容へと繋がっていった。

4.4 テーマC: グローバルキャリア志向の捉え直しのプロセス

ここでは第3のテーマである「グローバルキャリア志向の捉え直しのプロセス」の語りをみていく。前述の〈SIPEC ショックを受ける〉・〈ショック経験の意味づけをする〉(BFP)の後に、どのようなプロセスを通じて最終的に等至点〈自分らしいキャリアを志向する〉(EFP)に至るのか、類似する語りをケースC1からC3までの3つに分類して検討する。

【ケースC-1: SIPEC ショック経験によりグローバルキャリア志向が抑制されたケース】

C-1-F3: 帰国の方とかも沢山いて、そのなかで話していくと、やっぱり全然こう違うんだな、と思うことが多くなってきて。そうすると、普通授業だけでも、ちょっと難しいのに、こう[グローバルな]仕事になると、更に壁が高いんじゃないかな、(略)自分の精神的に厳しいのかな、ってちょっと思っちゃったりとか。

C-1-F4: 基本的には国内にいたいんです。(略)[帰国生と比べて]私[の英語]はもっと全然[ダメ]だ。まあだから自信がないというか、こんなんで[海外では]やっつけていける気もしないなってちょっと思っちゃうんですよね。(略)仕事で使って、間違いとなると、もう自分だけじゃない責任が。で、それを負うのが怖い程度の英語力、みたいな。

F3とF4は高い英語力や海外経験を有しているにも関わらず、英語力の自信の無さを語った。さらにその自信の欠如が、グローバル志向の低下にも繋がっていた。特にF3は「仕事になると、更に壁が高い」イメージと「精神的に厳しい」、F4の「全然[ダメ]だ」という語りには、語学力や海外で仕事をすることに関する不安が吐露されていた。

このように高い英語力を持つ学生が、海外でのキャリアに回避的になる要因として、SIPEC ショックによって自分の英語力を過小評価することが挙げられる。また同時に、この自信喪失を露呈するような語りは、グローバルキャリアを望むほどには英語力が伴わない、キャリアを遂行する上では不十分な英語レベルと自己評価しているようであった。つまり、英語力に対する自信喪失により、グローバル人材不相当とする低い自己評価がグローバルキャリア志向の低下の一因として考えられるだろう。

【ケース C-2: SIPEC ショック経験後も積極的にグローバルキャリアを志向していたケース】

前述の F3 と F4 のように、SIPEC ショックによるマイナスの影響が大きいと考えられる学生とは逆に、SIPEC ショック経験後も積極的にグローバルキャリアを志向していた学生もいた。この中には、独自の視点から活躍のフィールドを海外に求める帰国生 (F2, M1) と、海外で働くことに意欲的な学生 (M4, F5, M5) がいた。

C-2-F2: [グローバルキャリアについて] 今までいっぱい旅行して、こう飛行機に乗ったりする機会があったので、航空会社にはすごく魅力を感じています。[外資系] E 航空にすごく魅力を感じていて。(略) 日本にあまりこだわってなくて。……日本の外で仕事をしたいな、って考えたときに、やっぱりいろんな人がいる会社、いろんな国のいろんな文化をもつ人たちがいるっていうことで、なんか日本の良さを出していけるかな、って思いますね。

C-2-M1: 大学に進学してから英字新聞部に入ったり、ジャーナリズム指導室に入ったり、もしくはインターンでそのメディア関係のことにしたりしているので。(略) ……僕 1 才~7 才までイギリスに住んでたんで……日本人なのにずっとヨーロッパに住んでいることもあって、アジアに行ってみたいっていう気持ちが強かったんですね。[2016 年夏タイ留学予定]。……普段あまり、多くの人が目を向けられないような、ほんとに些細なことだったりとか。そういうところに実は結構大きな……問題とかに、つながるんじゃないか、っていう、なんかそういう発見を伝えたい。

帰国生の F2 と M1 は、語学力やこれまでの経験を活かせる外資系航空会社やメディア関連などのグローバルキャリアを志向していた。前述のようにほぼ米国人として育った F2 は、米国人から日本人へとアイデンティティの変容を経験する過程において、日本語を含め日本人らしくない自己への気付きを得ていた。また帰国生でもコンプレックスを抱えていた M1 は、多くの人が気付き難い身近な視点から独自の情報発信を望んでいた。F2 と M1 のケースは、各々の内省がウチなる欲求や自己実現の原動力と成り得ることを示している。

一方、M4 は帰国生ではなく留学経験を持ち、F5 や M5 は帰国生ではなく留学経験もないが、積極的にグローバルキャリアを志向している。その要因はどこにあるのであろうか。

C-2-M4: できれば [ノルウェーで] 仕事とかもあれば、こうぜひやりたいな、とは思うんですけど。(略) もし今後、ノルウェーに行くんだって、気持ちが強かったら、新聞記者、頑張ってたほうがいいのかな、って思うんですけど。(略) でもきっと、兄弟がいないので、まあ家族になんかあったら、僕がいろんな援助をしないといけないので……日本でやっぱりちゃんと働いたほうがいいかな、って思い始めてます。

M4 は 2 つ (新聞記者と不動産関係の仕事) という留学先の就労と国内就労の選択で揺れる心境を語った。また彼は「家族になんかあったら、僕がいろんな援助をしないといけない」と親孝行意識も覗かせた。ただ将来の親の介護が M4 のグローバルキャリアの選択や可能性を狭めるのか、それともこのままグローバルキャリアを志向するのかは、本人にも分からないような口調であった。

他方、海外経験のない F5 と M5 は次のように語った。

C-2-F5: [留学] 行きたかったんですけど……経済的にもムリ、難しいのもあったし、英語部 [ESS] も 1 回始めちゃったら、辞めたり、休んだりしたくなくて。(略) 会社に入って、その駐在とかの機会があれば、行きたいとも思いますし、例えばもし、就活が全部ダメだったら、なんか

ヘンな、妥協してヘンな企業行くよりは、お金貯めて留学行こうかな、とか思ってます。

C-2-M5: 僕は広告関係に興味がありまして。(略) せっかく英語も頑張っているんで、外資系ですとか、まあ、海外に拠点のある企業での広告活動とかでも重視したいな、と思っています。[将来的には海外を拠点に働きたいと思ってる?] はい。……そういう機会があれば、ぜひやってみたいと思う。

M5 はさらに、父親の影響についても触れている。

C-2-M5: [父親は] もともと海上自衛隊にいた人で。あの1年とか2年とか遠洋航海に出たりして、アメリカによく行っていたっていうのもあって、まあ海外志向が強いついていうか、のもあって、僕がこういう学部にいるっていうことも重なって、[父親は] せっかくなんだからそれを活かして、海外で働くとかいうのも考えたほうがいいんじゃないか、っていうのはあります。

F5 は「留学行ってる子とかは、なんか英語力っていうより人として成長して帰ってくるな、っていうのがすごいあるので、……そういう面は羨ましいなあって思う」と海外留学から得られる要素(異文化理解力や異文化適応力)も語った。留学経験者から人間的な成長を「羨ましい」ほど感じ取り「お金貯めて留学行こうかな」と語る彼女には、語学力や内的成長を含めた向上心が原動力なのかもしれない。

さらに M5 も積極的グローバルキャリア志向であることが分かる。彼もやはり SIPEC ショックを経験し、「ここ入ってみれば、まあ周りにそういう普通に日本語みたいに英語使っている人たちがいっぱいいて……自分 [が思っていたほど英語は] 得意じゃないな」と受け止めている。その上で「絶望するほどじゃないんですけど、まあでもガンバラないといけないな」と、父親の影響も相まって海外で働くことに意欲的な姿勢をみせた。

このようにグローバルキャリアを積極的に志向する学生には、帰国生は語学

力と海外経験をキャリアに活かすことに意欲的であり、非帰国生は語学力向上に加え異文化理解力や異文化適応力を培うことに意欲的であった。つまり、帰国生も非帰国生も積極的にグローバルキャリアを志向する学生は、語学力や、海外経験を活かしたり修得したりすることに積極的な態度（モチベーション）を携えていることが示唆された。

【ケース C-3: SIPEC ショック経験・就活経験後にグローバルキャリアを志向することに消極的になったケース】

グローバルキャリアを志向することに消極的だった学生の語りの特徴には3つのパタンがあった。第1のパタンはもともとグローバルキャリアへの関心は低い学生の語りであった。第2のパタンはSIPEC ショックや就職活動を経てグローバルキャリア志向が変容した学生の語りであった。そして、第3のパタンは海外経験が長すぎたために、そもそもグローバルキャリアというものに意味を見い出せなくなった学生の語りである。

第1のパタンはM6とF6の語りにみられた。もともとグローバルキャリアへの関心は高くなかったM6は、次のように語った。

C-3-M6: [内定先は]食品メーカーで、営業としてやっていきます。基本、国内ですね。(略)技術的な面で、自分がもし将来必要だな、と思ったら、そういう部分では行きたいとは思いますが。なんかただ漠然と海外に行きたい、というふうな感覚にはならないですね。

このようにM6には語学力や海外経験にこだわらない態度がみられた。また一人息子のM6は「就職活動を通して……一人息子に対してかける愛情の大きさというか、それに気付かされた。(略)本当に精神的に父と母に助けられた。」と、親孝行意識の高まりも伴って、国内キャリアを選択したようであった。

一方F6は、昨今のグローバル志向の言説やグローバル社会に対して批判的な姿勢を有していた。

C-3-F6: やっぱり……グローバル志向であることっていうのが、良いこ

とってされているっていうか。なんか英語ができる人がエライ人、みたいな感覚が、ここ [国際政治経済学部] にあるというよりは、もっと社会全体の話ですけど、なんとなくそういう感じがあるな、って私は感じてて。でも一概にそうだとは、いえないと思うんです。

F6 は、大学入学時に得意な英語と言語学を学ぶ目的で入学した。しかし「入って思いました。[大学を] 間違えちゃったなって。全然、国政 [国際政治経済学部] にいるタイプじゃないんですよね、私」と、学部に馴染んでいない心境を語った。彼女はもともと海外に特別興味があるわけではないなか、国際政治経済学部にはそのような学生が多く、帰国子女や留学経験がある学生の中で自分が浮いていると感じていたようだ。

彼女はグローバルキャリアを積極的に志向しない理由を、「英語を使って何ができる、その何ができるかっていうことのほうが重要だし、英語を学んできたけど、英語を使って仕事をしたいって気持ちがないのは、そういうことなんだと思います」と語った。もしかしたら彼女は、就活を通じて志望職種が明確になりつつあり、語学力を活かすことや海外経験へのこだわりが無いことを改めて認識していたのかもしれない。

第2のバタンは M3 の語りにみられた。「[英会話できて] 海外行ったらカッコイイよね」と家族に語るほどグローバル志向だった彼は、就職活動を終えて次のように語った。

C-3-M3: そうですね、まあもともとは航空系を志望していたんですけど、まあ就活してるなかで、あの、だんだん物流の企業にシフトしてって、っていう感じですね。(略) 海外で仕事したい、っていうのがまずあって、まあそれもあって、航空系だったんですけど。まあだんだんこう、まあ、よくいう自己分析をしてって、あ、本当に合ってるのは、この職種だ、みたいな。そういうところで、まあ物流にいったので。

グローバルキャリアを目指して航空業界志望だった M3 が、最終的に方向転換するに至った要因は、自己分析を通して適性と適職を模索した点にあったの

かもしれない。

そして第3のパタンは、海外経験が長すぎたためにグローバルキャリアに興味を見い出せなくなったM2の語りである。このような語りは一見特殊なものに見えるが、ケースA-3のところでも言及したように、幼い頃から海外で日々異文化に触れながら生活をしてきたM2のような人の中には、「地球規模的な協調性を志向した価値観」（森泉，2015，p. 83）であるコスモポリタニズムの精神が内化している可能性がある。しかし、同時にM2はグローバルキャリアを積極的に志向しない理由を、自分のモチベーションの低さにも関連させている。

C-3-M2: [就活時は] グローバルにいこう、っていうのは、なかったですね。なんかもともと、そんな意欲が高いほうじゃないので。(略) それ [グローバル人材] になろう、っていうのは、なんか、なれって言われたら勿論なりますし、必要とされたら全然フルで頑張ってやっていきたいんですけど、なんか、それを自分からやろうっていうのは、あんまりないんです。

M2が既にグローバル産業である自動車業界から内定を得ていることから推測すると、彼のグローバルキャリア志向が高くないのは、彼の「意欲」の低さに帰属するより「コスモポリタニズム」的思考が内化されたことに帰属する方が、論理的に整合性があるように思われる。

以上のように、積極的にグローバルキャリアを志向しない学生には、英語を活かした職業への夢や憧れより、自身の性格や適性、親孝行意識、グローバル志向偏重に対する批判やコスモポリタニズム的思考の内化といった、それぞれに独自の視点や思考から、むしろ意識的にグローバルキャリアを志向していないことが分かった。いずれにせよ、ケースC-3で取り上げた学生たちにみられる共通点は、実際の就活経験をとおして、グローバルキャリアにこだわらないキャリア選択を志向していた点であろう。

4.4.1 テーマCのまとめ：自分らしいキャリアを志向する

ここまで、テーマCのグローバルキャリア志向の捉え直しのプロセスの語りを見てきた。本調査の協力者はケースC-1、C-2、C-3の3つに区分された。なかでもSIPECショック経験の意味づけによりグローバルキャリア志向は大きく2つに分かれた。プラスの意味づけの場合は、帰国生も非帰国生も語学力と海外経験に関する高い意識や意欲を持ち、積極的にグローバルキャリアを志向していた。一方、SIPECショック経験に対しマイナスの意味づけをしている学生は、英語力の自信喪失により自身をグローバル人材不相当と評価し、積極的にグローバルキャリアを志向していなかった。またこれらの学生は、自分自身の性格や適性、親孝行意識、グローバル志向偏重に対する批判やコスモポリタニズム的思考といった、独自の視点からキャリア選択を考えていた。

以上のことから、グローバル人材育成を目標とするグローバル系学部においても、誰もが積極的にグローバルキャリアを志向するとは限らず、準拠集団との比較による自信喪失の経験や就職活動の経験などを通して、グローバルキャリア志向は変化することが分かった。これらをTEM図に表すと、学生たちは国際政治経済学部の学びの中で、〈SIPECショックを受ける〉・〈ショック経験の意味づけをする〉(BFP) 経験を経て、〈グローバルキャリア志向が高まる〉・〈グローバルキャリアにこだわりがなくなる〉・〈グローバルキャリア志向は始めからない〉の3タイプに分かれていた。そして、その後どの学生も共通して、ショック経験や就職活動などの経験を通じて、〈自分のキャリア選択について試行錯誤する〉(OPP) から等至点〈自分らしいキャリアを志向する〉(EFP) に至っていた。さらにグローバルキャリアを積極的に志向するかどうかは、SIPECショックにより自尊心が崩壊した経験に対する意味づけやその捉え直し、そして語学力と海外経験へのこだわりや意欲に大きく影響する可能性が示唆された。

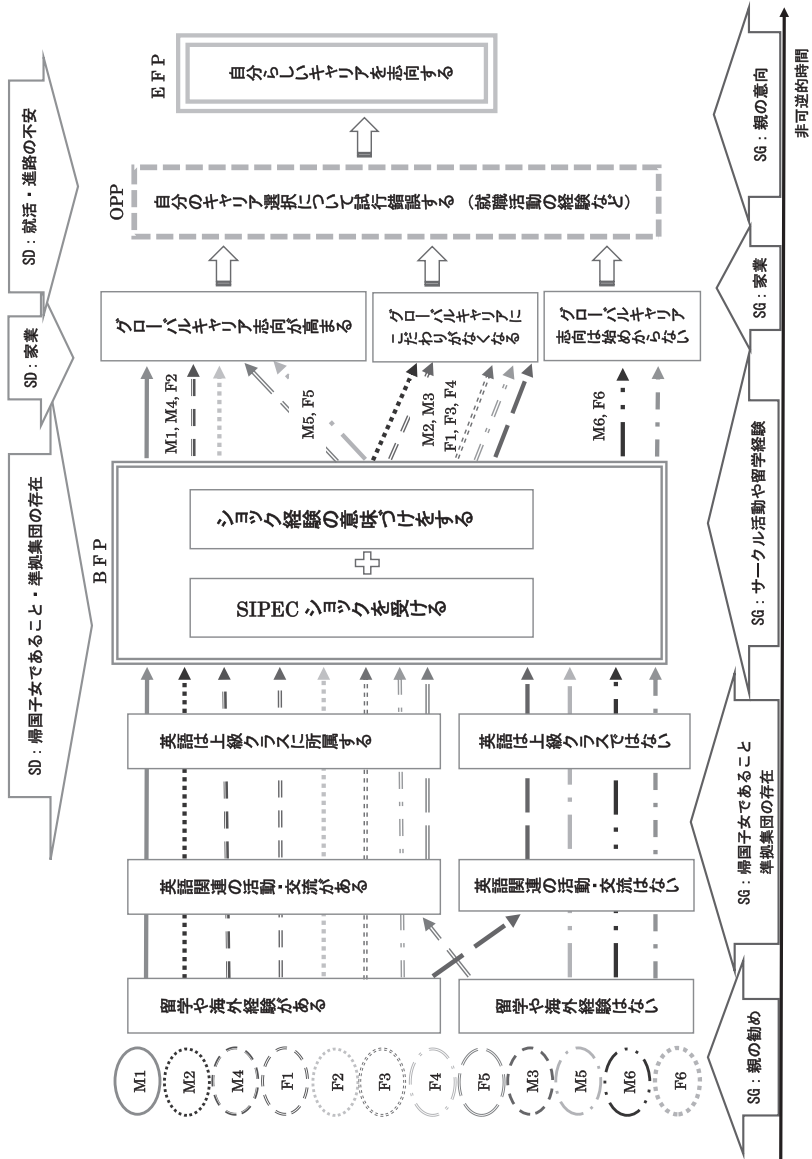


図1: グローバル系学部学生のグローバル志向とグローバルキャリアの選択に対する意識の変容プロセスを描いたTEM図

5. 考察

5.1 TEA 分析

本章では、TEA による語りの分析から得られた研究設問に対する解を提示する。

本研究の研究設問は以下のとおりであった。

グローバル系学部の教育環境において、グローバル人材としての資質（例えば、外国語能力や海外経験など）に関する学生の自己評価とグローバルキャリア志向は、どのような変容プロセスをたどるのか。

グローバル人材を目指す国際政治経済学部の学生には、大学入学以前から英語の成績が良好で卒業後に英語を活かしたキャリアに就くことを視野に入れている者が多い。しかし、本研究により、グローバル系学部に所属する学生の英語力・海外経験といったグローバル人材の資質とキャリア志向の関係には様々なパターンがあることが分かった。まずグローバル人材の資質と自己評価によるグローバルキャリア志向との関連性について、次に SIPEC ショック経験の意味づけや自己評価について考察する。

積極的にグローバルキャリアを志向しない学生は、英語力や海外経験などグローバル人材向きの資質を有していても、SIPEC ショック経験による英語力の自信喪失によりグローバル人材不相当とする低い自己評価と自己効力感が、グローバルキャリア志向の低下の一因として負の影響を与えていることが浮き彫りになった。

そして、前述のような学生の他にグローバル人材の資質を保持しつつ、或いはその資質にこだわらずに、自分自身の性格や適性、親孝行意識、グローバル志向偏重に対する批判やコスモポリタニズム的思考（岩田，1989）の内化といった、それぞれに独自の視点や思考から、むしろ積極的にグローバルキャリアを志向しない学生の存在も明らかになった。

このように SIPEC ショック経験への意味づけや自己評価により、学生のグローバルキャリア志向は大きく 2つのパターンに分かれた。SIPEC ショック経験

にプラスの意味を付与する場合は、帰国生も非帰国生も語学力と海外経験に対する高い意識や意欲を持ち、積極的にグローバルキャリアを志向していた。一方マイナスの意味づけをする場合は、英語力の自信喪失によりグローバル人材不相当とする低い自己評価がみられた。またショック後の意味づけにあまり左右されなくても、就職活動を通じた様々な独自の視点や思考から積極的にグローバルキャリアを志向しない学生がいた。特にケース C-1 のように低い自己評価をしていた F3 と F4 は、「仕事になると、更に壁が高い」「精神的に厳しい」と語学力や海外で仕事をするに対する不安を語った。グローバル人材育成に関する問題のひとつに、日本の若者の内向き志向が挙げられるが、海外への興味関心を含め、内向きな学生には留学の意志はなく、海外での生活や対人関係、語学力不足、留学先の教育レベルの高さに対する不安を抱えていることが分かっている（小島他，2014，2015）。低い自己評価にこのような不安が付帯し続けることで、グローバル人材不相当とする自己評価はますます助長されてしまうだろう。これがグローバル系学部に所属する学生の落とし穴といえよう。

以上のように、グローバル人材としての優れた資質を有する構成員が多く所属するグローバル系学部（準拠集団）の中で、自信喪失を経験する学生がいたものの、この経験に対する意味づけの違いによって、グローバルキャリアに対する態度が積極的にも消極的にも変化することが分かった。TEM 図で表したように、学生たちは、〈SIPEC ショックを受ける〉・〈ショック経験の意味づけをする〉（BFP）プロセスの後に、〈グローバルキャリア志向が高まる〉・〈グローバルキャリアにこだわりがなくなる〉・〈グローバルキャリア志向は始めからない〉の3タイプに分かれていた。そして、どの学生もショック経験や就職活動などを通じて〈自分のキャリア選択について試行錯誤する〉（OPP）プロセスを経て、等至点〈自分らしいキャリアを志向する〉（EFP）に至っていた。

5.2 質的データと量的データの統合

ここでは、TEA を用いた質的データの分析結果の trustworthiness を高めるために、本調査の質的データと親研究（張，2015）で得た量的データ（海外志向性

得点)を統合する。異なる2つの形態のデータを混合することで、いずれか一方の形態のデータのみでは知り得ないシナジーの知の構築を目指す混合研究法(Creswell, 2015 抱井訳 2017; Fetters & Freshwater, 2015; 抱井, 2015)では、量的・質的調査結果の統合により導出される新たな知見をメタ推論(meta-inferences)(Teddlie & Tashakkori, 2009 土屋・八田・藤田監訳 2017)と呼ぶ。以下では本研究のメタ推論を提示する。

張(2015)では日本人学生160名($M=20.94$ 歳, $SD=1.69$, 女性66.25%)に対し質問紙調査を実施しており、調査参加者の81%は国際政治経済学部の学生であった。160名の海外志向性得点は、6件法で平均値が4.43($SD=1.08$)だった。質問項目には、「将来、海外に仕事の拠点をもちたい」、「将来、海外との関わりのある仕事に就きたい」、「国によっては、海外で働きたい」など、大学生のグローバルキャリア志向を測定する全8項目($\alpha=.90$)が用いられた。160名の質問紙調査参加者のうち40名($M=19.55$ 歳, $SD=1.09$, 女性67.5%)がインタビュー調査への協力の意思を示した。なお、インタビュー調査への協力の意思を示さなかった120名($M=4.44$, $SD=0.98$)と協力の意思を示した40名($M=4.38$, $SD=1.36$)の海外志向性得点の平均値に統計的有意差はみられなかった($t(158)=0.238$, $p=.81$)。これにより、インタビュー参加者が海外志向性において特殊なサブサンプルではないことが示された。男女間における海外志向性得点の平均値は、120名のグループには女子の方が高い傾向がみられたが(男性: $M=4.21$ ($SD=1.11$), 女性: $M=4.54$ ($SD=0.89$), $t(117)=1.774$, $p=.08$), 男女の間に意味のある差異はみられなかった($r=.16$)。40名のグループの男女間においても海外志向性に有意差はみられなかった(男性: $M=4.17$ ($SD=1.32$), 女性: $M=4.49$ ($SD=1.39$), $t(38)=0.697$, $p=.49$)。最終的に40名のインタビュー候補者の中から、海外志向性得点、性別、学年を考慮の上、幅広く多様な声を収集するための最大多様性サンプリング法(Patton, 2002)を用いてインタビュー協力者12名を選定した。ただし、質問紙調査が本インタビュー調査の1年前に実施されていることから、インタビュー調査協力者に1年生はいない。

図2は量的・質的データの統合を可視化したジョイントディスプレイ¹⁰⁾であ

る。中央に質問紙調査の参加者全員 ($n=160$) から得られた海外志向性得点の箱ひげ図を配置し、その左右にインタビュー協力者 12 名の一人ひとりを示す記号と対応する海外志向性得点を付置した。また、質問紙から得られた協力者の海外志向性得点と TEA 分析の結果得られた一人ひとりのグローバルキャリア志向のあり方が収斂した場合には「○」を、部分的に収斂がみられた場合には「△」を、そして両者の間に大きな齟齬がみられた場合は「X」マークを付した。さらに、12 名一人ひとりのグローバルキャリア志向の特徴を示す典型的な語りを吹き出しのなかに示した。12 名中データの収斂がみられたのが 6 名 (M1, M2, M4, M6, F2, F6)、部分的に収斂がみられたのが 5 名 (M3, F1, F3, F4, F5)、大きな齟齬がみられたのが 1 名 (M5) であった。

2 つのデータが収斂したケースは、量的・質的データの両方で高いグローバルキャリア志向をみせた帰国子女の M1 と F2 および海外留学経験者の M4、2 つのデータの両方で低いグローバルキャリア志向をみせた M6 と F6、そして量的・質的データの両方でグローバルキャリア志向が中程度の M2 であった。

以下では、量的・質的データの収斂が部分的にみられた 5 名と収斂をみなかった 1 名のデータに着目し、質的・量的データ間の齟齬が何に起因するのかを検討する。

まず、量的・質的データの収斂が部分的にみられた 5 名について検討する。M3 の海外志向性得点は第 3 四分位数を超える 5.75 と非常に高い得点であった一方で、1 年後に実施された本調査のインタビューでは、キャリア選択において重要なことは国内か海外かということではなく、「自分に合っている」職種か否かであるとし、就職活動を終え新たな認識を得たことを語っている。F1 についても、尺度得点は第 3 四分位数と同点の 5.25 点と高い海外志向性を示していたものの、その語りからはグローバルキャリアに対する強いこだわりはみられなかった。高校時代の短期留学によって海外の人と話せるようになったことが楽しかったためグローバル系学部を志望したことが F1 によって語られている

10) 量的・質的データ収集の両方から得られた結果を統合した図表のこと (Creswell, 2015 抱井訳 2017, p. 139)。

ことから、1年生の質問紙調査参加時には彼女の外向き志向がまだ残っていたと思われる。しかし、その後の心境の変化から国内での大学院進学を考えるようになったことで、彼女のグローバルキャリア志向はインタビューからは伝わってこなかったと思われる。同様にF3とF4も尺度得点がともに第2四分位数よりやや高い4.88であったが、語りからは基本的に国内にとどまりたい思いが吐露されていた。F3については、1年生のときに参加した質問紙調査の海外志向性得点は高かったものの、SIPECショックの経験を経る中で自信を喪失し、その結果グローバルキャリア志向に修正を迫られたと解釈することができる。また、4年生のF4の場合もSIPECショックにより自信を喪失した経験を語っていたが、これに加え質問紙調査に参加した3年時には現実的ではなかった進路の問題が、最終学年になることでより現実味を帯び、家業を継ぐ選択について真剣に考えるようになった結果が2つのデータ間のズレとして表れたものと解釈することができる。一方、上述した学生の例とは反対に、4年生のF5については、3年生の時の海外志向性尺度得点は中央値と等しい4.63であったものの、インタビューの語りからは海外に対する憧れとともに、積極的にグローバルキャリアを志向する態度に変容したことが伝わってきた。前節のTEA分析でも触れたように、F5の場合は海外経験をもたないことによる自信のなさを、海外で自己実現に向かって努力する友人への憧れを原動力にプラスに変えて、積極的にグローバルキャリアを志向するように意識を転換していたといえる。

唯一質的・量的データの間には大きな齟齬がみられたM5のケースも、上述したF5と同じように、SIPECショックに対するM5の意味づけと、その結果としての彼の意識転換によって説明できるだろう。M5とF5の違いは、M5の海外志向性得点がF5のそれに比べ極端に低かった点である。M5の海外志向性尺度の得点は第1四分位数よりさらに低い3.12だったが、1年後のインタビュー調査では前向きにグローバルキャリアを志向していることを彼は語っている。M5もまた、多くの非帰国子女のように、周囲の英語能力の高さに圧倒され自信喪失に陥った結果、海外志向性得点が抑えられていたと推測される。特にM5は地方の県立高校出身であったこともあり、SIPECショックは彼にかなりの衝

撃を与えたと思われる。しかし、TEAによる語りの分析からもわかるように、M5はSIPECショックの経験を前向きに意味づけるようになり、父親からの影響も相まって、1年後のインタビュー調査時には積極的にグローバルキャリアを志向していたと考えることができる。

以上のように、本研究では、質的データの分析に量的データを補助的に用いることで、どちらか一方のデータのみでは知り得なかった新たな知見を得ることができた。第1に、TEAによる分析結果のtrustworthinessを、量的データと質的データを比較対照することによって示すことができた。第2に、SIPECショックの経験にどう向き合うかにジェンダー差があることも示唆された。女子の場合、量的・質的データの齟齬がある場合には、最初は高いグローバルキャリア志向（高い海外志向性得点）をもちながら、SIPECショックの経験を経ることで、英語の力や海外経験があるにもかかわらず、グローバルキャリア志向にブレーキがかかるというパターンがF3とF4の2名のケースにみられた。これが赤津ら（2018）がいうところの「SIPEC症候群」であり、グローバル系学部にありがちな「落とし穴」といえる。一方、男子の場合、同じように海外志向性得点と語りの間に矛盾がみられたケースでSIPECショックに言及していたのはM5のみで、しかも彼の場合はSIPECショックの経験をバネにグローバルキャリアを積極的に志向するようになっていた。第3に、海外志向性尺度の得点のみからは決してみえてこない、グローバルキャリア志向に関する新たな知見が量的・質的データが収斂したM2のケースからみられた。帰国子女として長期海外生活経験をもつM2には、コスモポリタニズム（地球市民）的意識（岩田，1989）が醸成されることによって、もはや「国内」「国外」といった二分法的な視点では思考しなくなっていることがインタビューの語りから示唆された。この非二分法的思考が、彼の海外志向性得点を4.00という中程度のレベルに抑えた可能性がある。このことは、特定の数字（例えば尺度得点）には様々な異なる意味づけが存在し得ることを示しており、これを明らかにすることが今回可能になったのは、質的・量的データの両方を統合する混合研究方法を用いたことのシナジー効果といえる（Creswell, 2015 抱井訳 2017; Fetters &

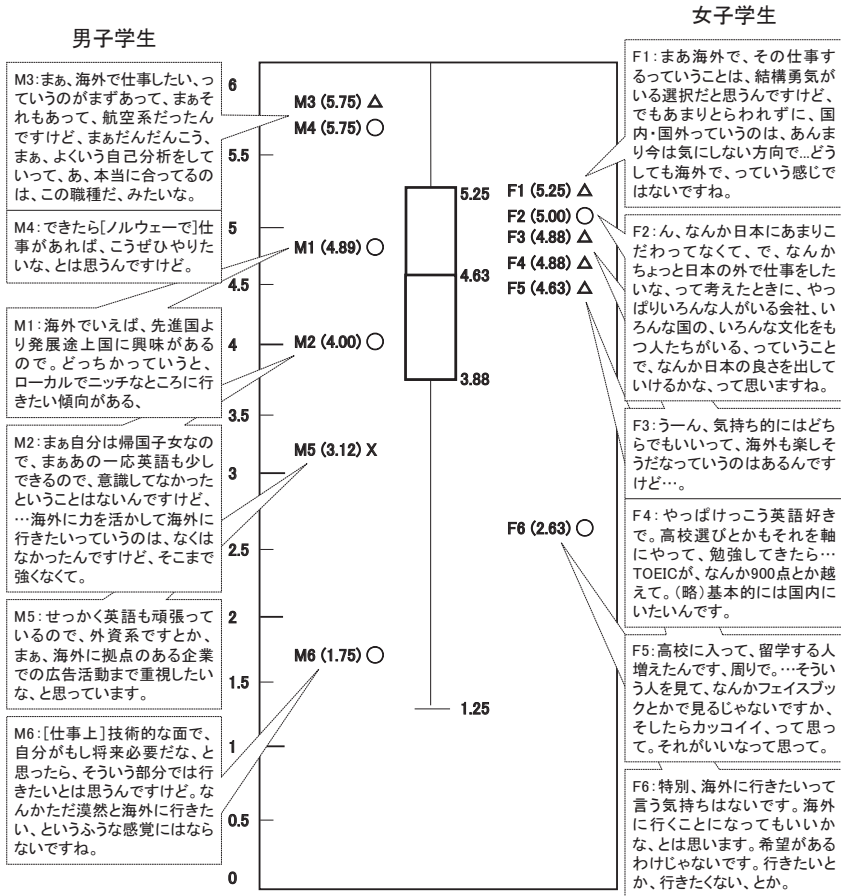


図2. 海外志向性得点とグローバルキャリアの語りを統合したジョイントディスプレイ

- 注1) 海外志向性得点に関する質問紙調査参加者 ($n=160$) の箱ひげ図 (最小値=1.25, 第1四分位数=3.88, 第2四分位数=4.63, 第3四分位数=5.25, 最大値=6.00)
- 注2) M1~M6 は男子学生, F1~F6 は女子学生のインタビュー参加者を示す。() 内の数字は各インタビュー調査協力者の海外志向性得点。
- 注3) 海外志向性得点と語りのデータ分析結果が収斂している場合は「○」、部分的に収斂している場合は「△」、大きく乖離している場合は「X」を付した。

Freshwater, 2015; 抱井, 2015)。なお、今回得られたメタ推論は、より多くのサンプルサイズを用いて、今後質問紙調査により検証することで、一般化可能な知見の構築につなげることが可能であろう。

6. 結論

グローバル系学部環境において英語が得意な学生たちの誰もがグローバル人材を目指す訳ではないという、グローバル系学部の「落とし穴」ともいえる現象の背景に何があるのかを本研究は浮き彫りにした。第1に学生たちは高い語学力を持つ集団内で相互作用として SIPEC ショックという異文化体験をしていた。そして、そのショック経験への意味づけや就職活動などの経験により、積極的にも消極的にも学生たちのグローバルキャリア志向が変化していた。さらに、その変化や気づきのプロセスを経て、学生たちは自分らしいキャリアを志向するに至っていた。つまり、学生たちが積極的にグローバルキャリアを志向するか否かには、SIPEC ショックにより自尊心が崩壊したことに対する意味づけの違いや、英語力と海外経験への意欲やこだわりの強さが、大きく影響していることが分かった。そして、TEA 分析によるこれらの結果の trustworthiness が、質的・量的データの統合により作成したジョイントディスプレイによって、より高められたといえる。

グローバル人材候補生が多く在籍する国際政治経済学部の一部の学生が、自己の英語能力を過小評価するあまり「SIPEC 症候群」(赤津ら, 2018)に罹ってしまうことは、Gore & Cross (2014) が指摘する「小さな池の大きな魚効果 (the big-fish-little-pond effect)」が生じるのと類似の現象であろう。つまりこのような学生たちは本来高い能力を持っているにもかかわらず、優秀な人が集まる場所では、劣等感から自尊心や自己肯定感が低下してしまい、実力を発揮することができず、ますます自信を失ってしまう。そして、その自信の無さから、ますますパフォーマンスが低下するというマイナスの連鎖に陥ってしまうことが危惧される。さらには負の連鎖により学生たちがグローバルキャリアの道を断念するようであれば、それは教育的にも社会的にも大きな損失であり、将来

的には人的資本や経済発展の打撃と成り兼ねないだろう。

近年多方面からグローバル人材論争が盛んに叫ばれるなか、その育成の役割を担うことを期待されるグローバル系学部・学科は、英語が得意な準拠集団に潜む落とし穴（危険性）に留意した上で、カリキュラム、授業の進行方法、留学相談などを提供することが肝要であろう。赤津ら（2018）が指摘するように、国際政治経済学部のようなグローバル系学部環境においては、周囲の学生と自身の能力を比較するのではなく、過去の自分と現在の自分の能力を比較するよう学生たちを導くことも、彼らの可能性を最大限に引き出す上で重要であると考えられる。今後は、どのような要因が SIPEC ショックのような経験に対しレジリエンスを高めることができるかを探究する必要があるだろう。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べたい。本研究においては、女子のインタビュー調査協力者の海外志向性得点が男子に比べばらつきが少なく、比較的高得点者に固まってしまったことは否めない。一つには、質問紙調査時に利用可能であった調査協力者がインタビュー調査時に利用可能でなくなるという問題があったためである。これは、縦断研究や混合研究法の順次デザイン・多段階デザイン（Creswell, 2015 抱井訳 2017）のようにデータ収集が時間的間隔を置いて複数回行われる場合に起こり得るサンプルの漸減問題である。また、インタビュー調査のサンプルサイズが小さいことや、アンケート調査においてランダムサンプリングが使用されていないことから、本研究結果の一般化可能性は限定的であるといえる。これらの点を方法論的限界として挙げておく。

本研究はグローバル系学部という準拠集団が個々人の学生に与える自己評価に対する影響を着眼点として、グローバルキャリア志向の変容のプロセスを探ることを目的とした。したがって、大学生のキャリア選択研究において中心的に用いられている自己効力感（例えば、浦上, 1995; 安達, 2001; 2004; 楠奥, 2006）については分析の主要概念としては含めていない。しかしながら、これまでの研究により、自己効力感が高い者は積極的に良好な進路選択行動をとることが分かっている（佐藤, 2016）。本研究においては、SIPEC ショック経験を経た後も意欲的にグローバルキャリアを志向する学生もいれば、ショック経

験を機にグローバルキャリア志向が萎えてしまう学生もいた。今回は、準拠集団との比較によって自信を喪失する経験に学生がどのような意味を付与するか、その違いを中心に研究協力者のグローバルキャリア志向の差を論じたが、この差が個々人のもつ自己効力感に関連する可能性は大いにある。したがって、今後は、自己効力感を量的に測定するとともに、学生の語りもそこに統合的に分析するような混合型研究を実施することで、グローバル系学部学生のグローバルキャリアに対する意識と選択のプロセスを解明することを検討したい。

引用文献

- 青山学院大学 国際政治経済学部・研究科ホームページ. 数字で見る SIPEC. <http://www.sipec.aoyama.ac.jp/data/> (2020年9月6日アクセス)
- 赤津成美・廣岡理奈・二見輝 (2018). 「グローバル系学部症候群」をめぐる考察——グローバル人材教育環境における準拠集団の影響——. 青山学院大学国際政治経済学部学生研究論文集, 28, pp. 66–67.
- 安達智子 (2001). 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討——教育心理学研究, 49, 326–336.
- 安達智子 (2004). 大学生のキャリア選択——その心理的背景と支援. 日本労働研究雑誌, 46 (12), 27–37.
- 張弘基 (2015). 伝統的価値観とグローバル人材育成が大学生の扶養意識に与える影響——日本人大学生と韓国人大学生の比較を通じて——. 青山学院大学国際政治経済学部学生研究論文集, 26, pp. 5–38.
- Collins, R. L. (1996). For better or worse: The impact of upward social comparison on self-evaluations. *Psychological Bulletin*, 119 (1), 51–69.
- Creswell, J. W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Thousand Oaks, CA: SAGE. (クレスウェル, J. W. 抱井尚子 (訳) (2017). 早わかり混合研究法 ナカニシヤ出版)
- Felson, R. B., & Reed, M. D. (1986). Reference groups and self-appraisals of academic ability and performance. *Social Psychology Quarterly*, 49 (2), 103–109.
- Festinger, L. (1950). Informal social communication. *Psychological Review*, 57 (5), 271–282.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117–140.
- Fetters, M. D., & Freshwater, D. (2015). The 1+1=3 integration challenge. *Journal of Mixed Methods Research*, 9(2), 115–117.
- グローバル人材育成会議 (2011). グローバル人材育成推進会議中間まとめ. Retrieved from http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf (2020年1月7日)
- Gore, J. S., & Cross, S. E. (2014). Who am I Becoming? A theoretical Framework for Understanding Self-Concept Change. *Self and Identity*, 13, 6, 740–764.

- Hesse-Biber, S., Rodriguez, D., & Frost, N. A. (2015). A qualitatively-driven approach to multimethod and mixed methods research. In B. Johnson and S. Hesse-Biber (Eds.), *The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry*, (pp. 3–20). New York: Oxford University Press.
- Hyman, H. H. (1918). *The Psychology of Status*, *Archives of Psychology*, No. 269. (ハイマン H. H. 館逸雄 (監訳) 七森勝志 (訳) (1992). 地位の心理学 巖松堂出版)
- 稲垣佳穂・櫻井里紗 (2014). 日本の大学生は本当に内向き志向か? —「グローバル人材」と「内向き志向」のイメージをめぐる考察—. 青山学院大学国際政治経済学部学生研究論文集, 24, pp. 3–38.
- 岩田紀 (1989). コスモポリタニズム尺度に関する経験的検討 社会心理学研究, 4, 54–63.
- 抱井尚子 (2015). 混合研究法入門 質と量による統合のアート 医学書院
- 金子邦博・清松敏雄・増田浩通・公平正一 (2016). 「内向き志向」の若者を「外向き志向」に育てるプロジェクト研究 経営・情報研究: 多摩大学研究紀要, 20, 199–202.
- 加藤恵津子・久木元真吾 (2016). グローバル人材とは誰か 株式会社青弓社
- 小島奈々恵・内野悋司・磯部典子・高田純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人蘭・矢式寿子・吉原正治 (2014). 日本人大学生の海外留学に関する意識調査——「内向き志向」と留学意志の関係 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 30, 21–26.
- 小島奈々恵・内野悋司・磯部典子・高田純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人蘭・矢式寿子・吉原正治 (2015). 日本人大学生の国際交流に関する意識調査——「内向き志向」と国際交流意志の関係 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 31, 35–42.
- 楠奥繁則 (2006). わが国の大学生における進路選択過程に対する自己効力研究の課題 立命館経営学, 45, 1, 147–162.
- Lincoln, Y. S. & Guba, E. G. (1985). *Naturalistic inquiry*. Beverley Hills, CA: Sage.
- Merton, R. K. (1957). Social structure and anomie. *Social theory and social structure* (Rev. and enl. Ed., ch.4: pp. 131–160). New York, NY: Free Press. (マートン, R. K. 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 (訳) (1961). 社会構造とアノミー 社会理論と社会構造 みすず書房)
- 森泉哲 (2015). 異文化に対する態度と英語習熟度——コスモポリタニズム尺度を使用して—— *Journal of the Nanzan Academic Society*, 97, 81–99.
- 両角亜希子 (2011). 大学のグローバル人材育成はどこまで進んでいるか カレッジ・マネジメント, 168, 14–24.
- Morse, S., & Gergen, K. J. (1970). Social comparison, self-consistency, and the concept of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 148–156.
- Olsen, J.E. 海外の視点から見たグローバル人材. グローバル人材育成推進事業/西日本第1ブロック共同ワークショップ「グローバル」の普遍性について Retrieved from <https://www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-1622/37661/file/7.pdf> (2020年1月3日)
- Patton, M. Q. (2002). *Qualitative research and evaluation methods* (3rd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 佐藤舞 (2016). 大学生の就職活動および自己効力の縦断的研究 教育心理学研究, 64,

26-40.

- 末田清子 (2012). 多面的アイデンティティの調整とフェイス (面子) ナカニシヤ出版
- 末田清子 (2017). ある女性が外資系企業でグローバル・リーダーとしてキャリアを構築したプロセス 異文化コミュニケーション学会第 32 回大会発表論文集. 8.
- 鈴木雅久 (2018). [論考] 日本におけるグローバル人材のこれから ウェブマガジン, 留学交流, 1 月号, vol. 82, 13-30.
- 高田利武 (2011). 社会的比較の発達過程に就いて——青年期から老人期に至る実証的知見の展望——研究論文集, 112 号, 1-38.
- Teddle, C. & Tashakkori, A. (2009). *Foundations of mixed methods research: Integrating quantitative and qualitative approaches in the social and behavioral sciences*. Thousand Oaks, CA: Sage. (テッドリー, C.・タシャコリ, A. 土屋敦・八田太一・藤田みさお (監訳) (2017). 混合研究法の基礎—社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合 西村書店)
- 富永健一・塩原勉 (編) (1975). 社会学セミナー 1 社会学原論 有斐閣
- 浦上昌則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大學教育学部紀要, 教育心理学科, 42, 115-126.
- Yashima, T. (2009) International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (Eds.) *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 144-163). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編) (2012). TEM でわかる人生の経路 質的研究の新展開 誠信書房
- Yonezawa, A. (2014). Japan's challenge of fostering "global human resources": Policy debates and practices. *Japan Labor Review*, 11(2), 37-52.
- 吉田文 (2014). 「グローバル人材の育成」と日本の大学教育——議論のローカリズムをめぐって——教育学研究第 81 巻, 第 2 号, 164-175.

謝 辞

本研究の実施にあたりご協力を頂いた張弘基氏と、本稿に対し貴重なコメントをくださった申知元氏に、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。